



中村 陽子

NPO法人メダカのがっこう理事長
<http://www.npomedaka.net/>

生きる力を育む

36

佐渡で始まった ネオニコチノイド不使用の動き

家族の不調をきっかけに、食や環境の危機を深く見つめるようになった主婦が、地球と人間の生きる力を取り戻す術を考えていきます

以前、ネオニコチノイドという恐ろしい農薬があることを書きました。日本人の科学者が発明した農薬で、人間には害のない優れた殺虫剤ということで、アメリカで化学賞を受けました。その受賞理由の1つに、減農薬を可能にしたというものがありません。というわけで、この農薬は、環境保全型農業の進行と共に毎年使用量が増してきました。

「メダカのがっこう」は、2001年から佐渡の農家に呼びかけ、農薬・化学肥料を使わず冬の田んぼに水を張り、生きものがいっぱい棲める田んぼを広げました。農家たちは、「トキの田んぼを守る会」を作り、「メダカのがっこう」と一緒に生きものの調査を始めました。当時、佐渡ではまだ農薬の空中散布が行われていたが、山あいの田んぼでは、赤や黄色や青やオレンジのイトトンボが飛び交い、カエルやヘビや水生昆虫がうじゃうじゃいて、生きものの調査が楽しくて仕方ありません

んでした。農薬を使わないこと、「耕さない・冬・水・田んぼ」にすることで、田んぼの生きものたちは数が増えています。

見せかけの環境保全型農業

これで空中散布がなくなったらもつともつと生きものたちが増えるだろうと楽しみにしていました。が、いざ空中散布が廃止されると、ミツバチや赤トンボが消えていったのです。環境保全型農業の救世主と思われていたネオニコチノイドが登場したからです。理由の1つは農薬の撒き方です。空中散布を行わないといっても、農薬をかけた農家はラジコンヘリを使いますが、その濃度は、1000倍も濃いのです。すると、田んぼの水を飲んだミツバチが巣を持ち帰り巣ごと全滅するのです。普通農薬を体に着けて持ち帰ったミツバチは、門番が叩き落として巣に入れないのですが、ネオニコチノイドは無臭なので門番が気がつかないのです。誠に巧妙な農薬

です。もう1つの理由は、空中散布を省くために、苗箱の段階から農薬を入れるようになったことです。こうしてたつぷりネオニコチノイドの成分を含んだ苗を田んぼに植えると、その頃ちょうど生まれたばかりのトンボのヤゴが全滅するのです。

トキの田んぼを守る会の農家が、全く農薬・化学肥料を使わないで作るお米は、「トキひかり」と呼ばれています。手間がかかることで生産量をなかなか増やすことができません。そのため、佐渡では、農薬、化学肥料を5割に減らした減農薬米が伸びていきました。ここでもネオニコチノイドの使用量が増えています。環境保全型農業を前面に出してトキと共に生きる島を目指しながら、実際には生態系は大きく壊れていきました。

日本は原因がネオニコチノイドと認めない

2009年トキの放鳥の頃、私